真宗大谷派岐阜教区

# 岐阜同朋 ぎふどうぼう

2016.07 115


- 真宗と死（小笠原文雄先生インタビュー）
- 日本人の心のふるさと 聖徳太子
- コラム しょうしんげ ●太子会参拝
- 一枚の寫眞の記憶 —のすたるじっく・ふぉと—

上徳坊 太子会　　各務原市上中屋



## 一枚の寫眞の記憶

—のすたるじっく・ふぉと—

写真は1966（昭和41）年4月25日～27日に参加されたものです。

「本山に行きたい」「ご奉仕したい」と、2泊3日の奉仕に多くの募集者が集まりました。参加された方々は、御影堂・阿弥陀堂・枳殻邸・同朋会館・同朋会館周辺等の清掃、皆さんと一緒に食事、そして座談会と。

日常生活を離れ、すべての初めての体験ばかりなのに、楽しく嬉しそうに過ごされているようにうかがえます。

1961（昭和36）年、親鸞聖人七百回御遠忌を御縁として、翌年1962（昭和37）年から「真宗同朋会運動」が始まり、この運動の中心の一つとして『真宗本廟奉仕』が開始されました。寝食を共にし、親鸞聖人の教えを聞き、真宗門徒としての生活を体験していただくことが目的とされました。

白い割烹着がまぶしく、その気持ちが奉仕団の心意気をあらわしているようです。

### 編集後記

「健康ならいいが、寝たきりになって、人の世話になりながら生きていくのは嫌だ」「認知症になりたくない。そうなったら早く死にたい」「延命治療だけはしてほしくない」と、そんな話をよく耳にします。いざ「死」を突き付けられ死を身近に感じると、死が受け入れられず、恐怖と不安に襲われたりしますし、また日頃から「死に方」についてあれこれ考えたりします。多くの場合、「死」と「医療」は切っても切れないものとなっています。

今回はそんな現代の医療の立場から死を考えるというところに視点をおきましたが、私たちがかかえる問題は、私たちを取り巻くこの社会に、いろいろと渦巻いています。前号ではそんな一つ「非戦と平和」というところに視点をおき、考えてみました。様々な問題を取り上げ考えていく中、やはりその根幹には「真宗の教え」があり、「教え」をいただく私たちは、目の前のかかえるものをとらえる時、それは「教え」から学ぶという姿勢を欠くことはできません。

『岐阜同朋』を読んでいただき、皆様から御感想や御質問、御批判等々、いろいろな御意見をよせていただいています。その事にとても感謝しています。そういった御意見を真摯に受け止め、そしてお答えしていき、「真宗の教え」という視座から、これからも様々なものに取り組んでいきたいと思っています。

どんな御意見でも結構です。今後も皆様から多く御意見をいただけます事を願っています。

（羽）

発行・編集：岐阜教区出版委員会　真宗大谷派岐阜教務所　海岸秀道　〒500-8054 岐阜市大門町1　TEL.058-266-1378

本誌に関するご意見・ご感想をお待ちしております。

## 小笠原文雄先生にインタビュー

# 真宗と死

**今回、在宅医療に携わっている医師であり、真宗大谷派の僧侶でもある小笠原文雄先生に、医療の現場において、「いのち」をどのように受け止め、「死」とどう向き合っていらっしゃるのか、お話をいただきました。**

現在の日本では病院で死ぬのがあたり前。しかし、私は家での清らかな死「いのちの不思議さ」をたくさん体験しました。

「歩けなければ入院する」と言っていた78歳元教員が、卵巣がんで寝たきりとなった時「ひとりでも家で死ねるなんて、こんな幸せなことはない」と喜び、友達のいる時に旅立った。

食道がんで終末期の86歳女性が「ひとり暮らしでも最期まで家で暮らせるなんて100%満足」と娘に語り、「お母様、私も100%満足ですよ」の声を聞き「だったら2人合わせて200%満足だね」と大声で笑い、3日後娘と孫がいる時に旅立った。

夫に先立たれた、ひとり暮らしの妻がお仏壇の方を向いて旅立たれることも何度かあった。

私は、47名の在宅ひとり死を支えましたが、誰かいる時に9割以上の方が旅立たれました。家には不思議な力とあかり、つまり、不可思議な光があり、それに導かれての旅立ちのようです。死とは、そういうものかもしれません。

死ぬと思っていない人間には、死ぬ直前の人間の気持ちは分からないものです。しかし、「ひとりでも最期まで家にいたい」と望む人がいるのなら、その人を支え切ることが大切だと思います。

（小笠原文雄・談）

**Q** 「真宗と死」ということをテーマとして挙げさせていただきましたが、先生のお取り組みやご経験の中で死をどう捉えていらっしゃるのでしょうか。

**A** 暮らしの中に穏やかな「死」があると思いますが、「死」というものを感じるよりも「生」、「生きる」ですよね。「生きる」ということをどう捉えるか。そこに尽きるかなと思っています。死を見つめることにより、生かされている「いのち」が分かってくる。目には見えない「いのち」に気付かされるんだと思いますね。

ただ、「死んだらどうなるか」ということだけではなくて、今ある「いのち」をどのように生き切るか。その結果として、誰とも心が通わず「孤独死」として捉えられることもあるだろうし、念願叶う生き方ができて「希望死・満足死・納得死」となる場合もあるでしょう。

「いのち」をどう捉えるかということで「死」が変わり、「死」を見つめるからこそ、生かされている「いのち」が輝くと思います。

**Q** 先生は日本在宅ホスピス協会の会長と伺っておりますが、在宅ホスピス、ビハーラ、在宅医療、緩和ケア等、先生はどのように受け止められているのでしょうか。

**A** ホスピスはキリスト教の巡礼者が休む処から始まり、ビハーラは仏教ですね。しかし今では、ホスピスは生き方・死に方、いのち、看取りの考え方でもあります。在宅というのは家とか最近は施設も含みますが、そこで医師、看護師、ヘルパー等が連携して患者を支えていくのが在宅医療、そしてそこに緩和ケアが加わります。緩和とは痛み・苦しみを和らげることであり、ケアとは人と人の心が通うことによって温かくなり、そこから生きる希望や力がみなぎってくることです。このような選択肢があることを知っていただき、そこで「いのち」を考え、生き方、死に方を考えていただきたいのです。

**Q** 告知という、いのちの期限を突き付けられた時、患者さん本人、家族はどのように死を受け止め、どのように死と向き合うのでしょうか。

**A** 告知には、約48分間かけ真実を伝えます。それでも、「何故死なねばならないのか」とショックを受けられます。しかし、具体的に旅立たれた患者さんのお話をすると生かされている「いのち」に気付かれ笑顔が出てきますね。その結果、3割の方に延命効果もあるんです。

死ぬ処というのは、自分が最期に生きている処なんですね。いのちが落ち着くところ、そのところが定まれば、こころ定まる。「正定聚不退転」ということに想いを寄せますね。だから、穏やかに死ねる。

**医療という現場にたっていらっしゃる先生のお話を聴き、「いのち」「生きる」「死」ということを真宗の教えをいただく者として、どう見つめ、どう捉え、そして向き合っていくかを改めて考える、そんな機会をいただきました。ありがとうございました。**

**小笠原文雄先生**

羽島市竹鼻町・傳法寺住職
医療法人聖徳会 小笠原内科院長
岐阜県岐阜市加納村松町3-3
http://www.geocities.jp/ogasawaranaika
医学博士
日本在宅ホスピス協会　会長
日本循環器学会　専門医
日本在宅医学会　専門医
日本内科学会　認定医

上野千鶴子が聞く
小笠原先生、ひとりで家で死ねますか？
上野千鶴子（著）小笠原文雄（著）
朝日新聞出版

# 日本人の心のふるさと 聖徳太子

勝鬘経講讃太子像〈聖徳太子像〉（岐阜別院・蔵）

**「和国の教主聖徳皇　広大恩徳謝しがたし（略）」**（皇太子聖徳奉讃・聖p508）

私たち真宗寺院においては、本堂内陣余間に聖徳太子の絵像を七高僧の絵像と並べてお掛けするお作法があります。これは、宗祖親鸞聖人が太子を「和国の教主（日本の釈尊）」と仰ぎ、そのお徳を讃えておられることによります。

また、

**「大慈救世聖徳皇　父のごとくにおわします　大悲救世観世音　母のごとくにおわします」**（同・聖p508）

と、太子を父・母とお慕いなさって尊ばれておられます。太子は574年、用明天皇の御子として生まれ、名は厩戸王子あるいは豊聡耳命といわれます。母が崇仏派蘇我氏の出身であることから、蘇我馬子とともに仏教を日本にもたらした第一人者ともいわれています。たいそう聡明であり、20歳の時推古天皇の摂政となられ、「十七条憲法」や「官位十二階の制」を制定、遣隋使として小野妹子らを隋へ派遣するなど国政の改革にも力を尽くされました。

太子が目指された国家像は、仏教流通によって円やかな人間関係をつくり共に生き合う世界を実現することであったと思われます。その根底には、私たち一人ひとりの心の中に自分が一番、自分が可愛いという自己愛があり、そのことによって争いが起こり傷つけ合う人間の悲しさがあるということ、私の前に居る人も私も共に凡夫であり、自身の愚かさに気づくことこそが共に生きる大地を拓く基になるという仏教の教えを国つくりの基本とされたのです。「十七条憲法」において人間の大切な生きる指針を示されます。

**第一条「和らかなるをもって貴しとす、（略）」**

**第二条「篤く三宝を敬え。三宝とは仏・法・僧なり。（略）」**

**第十条「（略）我必ず聖に非ず。彼必ず愚かに非ず。共に是れ凡夫ならくのみ。（略）彼人瞋ると雖も、還りて我が失ちを恐れよ。（略）」**

親鸞聖人はこの尊く気高い太子の理想に深く共感され、善知識法然上人と並び最も大切な師であるといただかれました。また、四天王寺や法隆寺をはじめとする多くの寺院を建立され、『法華経』『維摩経』『勝鬘経』の解説書『三経義疏』を著され、生涯を通して仏教興隆に尽くされました。また太子は出家されることなく在家にて仏の教えをいただかれ、妻帯もなさいました。在家にありながら人間としてのほんとうに生きる道を仏教に求められ、争いのない世を願われた太子を親鸞聖人は心からお敬いになられたのです。

聖人は19歳の時、河内国磯長にあった太子の御廟に参籠され、ここで太子の夢告を受けられたといわれます。我が国が真実の仏教を明らかにするのにふさわしい地であることや、自分の命があと十年しかないことを告げられたといわれています。

その後10年が過ぎた29歳の春、どれだけ学んでもさらに自分の歩む道が明らかにならない親鸞聖人は、深まる苦悩を抱えながら救いを求めて、20年を過ごした比叡山を下りる決意をし、太子が建立された六角堂（頂法寺）に参籠されました。

そして95日目の明け方、救世観音（聖徳太子は救世観音の化身といわれている）から夢告を受けられ、吉水の法然上人のもとに向かわれます。お念仏の教えに出遇われ、一切の衆生が、仏の本願力によってありのままで救われていくという阿弥陀仏の本願の道を歩む者となられていくのです。こうして親鸞聖人は、聖徳太子の夢告によって師法然上人との出遇いを果たされたのです。

聖徳太子滅後、太子の御子であったといわれる山背大兄王は人心を集め天皇に擁立される動きがありましたが、当時の支配者であった蘇我入鹿は自身の権力を脅かすであろう山背大兄王を亡きものとするために斑鳩宮を襲撃します。いったん山背大兄王は生駒山に逃れるものの、「挙兵して入鹿と戦えば勝てることは間違いないが、私のことで戦乱になり多くの民・百姓が苦しみ命を落とすであろう。そんな事態を私は望まない。そんなことになるなら私はこの命を入鹿にくれてやろう。」と示し、斑鳩寺（法隆寺）に舞い戻り、一族22人もろともに自害したといわれています（斑鳩宮の悲劇）。ここに聖徳太子の血は絶えますが、その2年後の645年、「大化の改新」において中大兄皇子（後の天智天皇）・中臣鎌足（後の藤原鎌足・藤原氏の祖）の画策によって、入鹿は討たれ蘇我氏は滅亡します。

聖徳太子や山背大兄王の御こころが今を生きる私たち日本人のDNAに刻まれていることを願いたいと思います。同時に、先史以来現代に至るまで、私たち人間の生き方には悲しみや愚かさを感じずにはおられません。歴史に深く学びたいと思うことです。

## コラム　しょうしんげ

**極重悪人唯称仏**
**我亦在彼摂取中**
**煩悩障眼雖不見**
**大悲無倦常照我**

極重の悪人は、ただ仏を称すべし。
我また、かの摂取の中にあれども、
煩悩、眼を障えて見たてまつらずといえども、
大悲ものうきことなく、常に我を照したまう、といえり。

源信はお釈迦さまの教えを広く民衆に公開し、浄土の教えを根付かせました。その契機となった『我亦（我また）』の気づきの所に、私は深い感動を覚えずにはいられません。彼は、慈母に導かれ自身が仏縁から最も遠い極重の悪人であると自覚することによって凡夫とともに救われていく本願に出遇い、悪人の念仏往生の確信と慶びを得ました。

私も6年前に白血病でなくなった友に導かれ、親鸞の教えを学び直す機会を与えていただきました。そして、学んでいるつもりになっていました。

しかし、この度『コラムしょうしんげ』を書くに当たって、単なる語句の説明しか書けず、日常生活の中での正信偈の気づきについて全く書くことができませんでした。教えを知識としての理解で感動していただけで、自身の生活につながるような気づきにはなっていませんでした。恥ずかしい限りです。それも気づかせてくれたのが岐阜同朋の仲間でした。

# 太子会参拝

上宮寺　上徳坊

藤の花が咲き誇るこの季節、聖徳太子を縁にした法要「太子会」を行っている岐阜教区の2カ寺を訪ねました。

まず、4月27日、岐阜市前一色にある上宮寺の太子会に参詣いたしました。

阿弥陀経、正信偈、太子和讃等のお勤めの後、御文の拝読、それから住職による太子像の御法話がありました。

聖徳太子像（上宮寺・蔵）

聖徳太子「孝養の姿」の真影（上徳坊・蔵）

寺所蔵の縁起によると、本堂の厨子の中に安置されているのは、聖徳太子の16歳の時のお姿を表している木像だそうです。太子が、父である用明天皇の病気回復を祈る姿、「孝養の姿」といわれるものであり、乾漆像（漆を用いて作った像。中は空洞になっており、製作に多くの手間や時間がかかるので後にはほとんど作られなくなった）と伝えられています。

この木像がいつごろからお寺にあるのかは定かではありませんが、ご住職によると、江戸時代頃から安置されていると思われるというお話でした。寺伝の木像の縁起は、江戸時代の天保年間に書かれたという記載が見られます。

また、このお寺では、聖徳太子の木像の他にも親鸞聖人の木像もあり、本来の報恩講とは別に、聖人の木像を縁とした報恩講も特別に行っているそうです。2回の報恩講、そして太子会と、親鸞聖人、そして聖人が大変尊敬された聖徳太子、このお二人が伝えられたお念仏の教えを、現在に至るまで大切に相続されておられることがよくわかりました。

聖徳太子像御厨子（上宮寺）

聖徳太子像縁儀（上宮寺）

太子会法要（上宮寺）

上宮寺本堂

上徳坊山門前

もう1カ寺は、各務原市上中屋にある上徳坊です。5月3日の「太子会」にお邪魔しました。

お寺はもともと、愛知県江南市にあったようで、寺伝によると、お寺の創建は、聖徳太子のころに遡るといわれ、太子自らが彫られた御木像を安置し、当時は上宮寺と呼ばれていたようです。正慶が、親鸞聖人の教えに帰依したのち、織田信長の時代に、愛知県江南市から、現在の地に移り、聖徳太子の徳の字をいただき、上徳坊と改めたということです。

上徳坊の太子像は、太子2歳の時のお姿であると伝えれています。上半身裸姿で合掌されるお姿は、2歳の時、釈迦の入滅の日に『南無仏』と称えられたというお姿を表しており、奈良の法隆寺から伝えられたと寺伝にあります。ご住職の話によると、この御木像も、乾漆像ということでした。

聖徳太子像（上徳坊・蔵）

御木像の他にも、聖徳太子の「孝養の姿」の真影が本堂にかけられています。これは、第15代門主常如上人から下付されたものだということです。（17世紀後半）

（6ページ右上写真）

ご住職によると「太子会」という法要の始まりは定かではないが、おそらくお寺がこの地に来た当初から行われていたことが考えられるということです。

現在、上徳坊の「太子会」が5月3日に行われるようになったのは、日本の歴史上、最初の憲法を作られたといわれている聖徳太子にちなみ、この憲法記念日という祝日に、「太子会」を勤めているということであります。

当日の太子会法要では、太子会縁起の拝読、正信偈、太子和讃等のお勤め、講師による法話等がありました。多くの御門徒さんが参詣し、聴聞しておられました。

聖徳太子が日本に仏教を広められ、そして後に、親鸞聖人が聖徳太子のことを大変に尊敬されたそのお心が、大きく時を隔てた現在でも、脈々と引き継がれていることを拝見することができました。

7世紀、聖徳太子が、日本に仏教を広めたことは誰もが知っていることでしょう。しかしまた、そのことで、争いが起こり、日本を揺るがす大問題となりました。つまり仏教が広められるということは、大変なことであったことが窺えます。その後は、たちまち仏教は日本全体へと大きく広がり、浸透していくことになります。

太子会法要（上徳坊）

そういったことを経て、千年以上時がたった現在でも、仏教が今のように広がっていることを考えると、聖徳太子は、本当に大きなお仕事をして下さったということを改めて確かめるとともに、親鸞聖人が「和国の教主聖徳皇」と和讃にうたわれているそのお心をしっかりと頂いていくことが大切であると感じました。

聖徳太子像御厨子（上徳坊）